

レミュエル・ガリヴァーの悲惨と希望

服部典之

1. 始めに——壁と卵，様々なる卵

村上春樹が2009年のエルサレム賞を受けたとき、スピーチの中で「壁と卵」という比喩を使ってイスラエルの軍事弾圧を批判したことはマスコミが報道することで有名となった。彼のスピーチの当該箇所を見てみよう。

高くて堅固な壁とそこにぶつかって割れる卵とがあれば、私はいつでも卵の側に立つでしょう。……爆撃機や戦車や白リン弾が高い壁です。卵は、それらによって潰され焼かれ撃たれる非武装の市民たちなのです。……私たち人間はおのおの、多かれ少なかれ一つの卵で、私たち一人一人はもろい殻に包まれたかけがいのない一つの魂なのです。

人間は、かけがえのない魂がもろい殻に包まれている卵であり、社会の「システム」は壁だと言うのだ。卵は自分の前に立ちふさがる壁に対抗しようとしても、ぐしゃっと潰れてしまうしかない脆弱な存在だが、村上は社会のシステムがいかに正しく卵がいかに間違っているにも、常に卵の側に立ちたいと宣言することで、個人の尊厳を訴えかけた。

村上春樹のこのパフォーマンスは、小説家の社会的役割を訴えると同時に果たしている希有な例となった。ただ、この比喩は物事をかなり単純化して説明するものではある。これは、彼自身が読売新聞のインタビューに答えて、「仮説の中に現実があり、現実の中に仮説がある。体制の中に反体制があり、反体制

の中に体制がある」と言ったことが示すように、壁と卵は暫定的な区別であることを村上は見据えていると思われる。例えば人は、軽蔑する壁に卵を投げつけることで、侮蔑を表現しささやかな抵抗を示すことができる。村上によれば卵は非武装の市民だが、もし卵に強大な殺傷力を持った爆弾を装着させて壁に向かってスイサイド・アタックをかけるなら、壁は大混乱に陥るだろう。また卵は弱い個人を表すものであることもあれば、文学作品はその扱い方により、人間の不寛容を示す滑稽で痛烈な風刺を行うこともできる。

ジョナサン・スウィフト (Jonathan Swift) 作『ガリヴァー旅行記』 (*Gulliver's Travels*) の主人公ガリヴァーが最初に訪問する小人の国＝リリパットの政治には、二つの大きな宗教上の派閥が覇権を競っていることが描かれている。そして、この二者の隔たりを示す最大の論点は「卵を大きな端から割るか小さな端で割るか」であった。前者はビッグ・エンディアン、後者はスモール・エンディアンと呼ばれる。

小さな端で割る派のスモール・エンディアンは歴史が新しく、その習慣を強いられたビッグ・エンディアンは激しく反発し、リリパットの敵国であるブレフスキュ (海を隔てた所にあるリリパットと同じような島国) に亡命したり、そのような屈辱的な習慣を強られるよりは自ら死を選んだ者も1万1千人に上るとされている。すなわち、村上春樹の比喩ではもろい人間の個人の殻を現していた卵は、『ガリヴァー旅行記』では、政治や宗教の不寛容を現す象徴になっているわけだ。卵自体が壁であり、大きな端と小さな端のどちらを採るかで、人間は二つのグループに分断されている。

少しの脱線を許していただけるなら、ビッグ・エンディアンとスモール・エンディアンの対立は、村上春樹の『1Q84』の中のビッグ・ブラザー (ジョージ・オーウェルの『1984』に登場する専制君主) とリトル・ピープルの存在に受け継がれていることを指摘しておきたいと思う。2009年現在ベスト・セラーとなっている同氏の小説だが、最大の謎とされているリトル・ピープルがガリヴァー旅行記に登場する小人であるリリパット人の系列にあることは間違いのないと思われる。リリパットはガリヴァーの訪れる国の中で、最も硬直化した制度を持つ国で、権謀術数が渦巻く政治の権力争いが熾烈な場所だ (しかも小さ

いがゆえにかえて不気味である)。Lilliput という英語は、「小さな」という意味の幼児語の Lilli と、同じく幼児語で侮蔑を現す put が結びついた語であるとされている。put を people の訛りととると、Lilliput を Little People と解釈することも充分可能なのであり、『ガリヴァー旅行記』が現代日本小説にもいまだに影響力を持っている証と言えよう。(沼正三の『家畜人ヤプー』(1970年初版)という天下の希書もある。)

他にも例えばイギリスのブッカー賞受賞作家でブッカーの中のブッカーという最高の榮譽を勝ち得ている『真夜中の子供たち』(Midnight's Children, 1998年)を著したインド系イギリス作家サルマン・ラシュディ(Salman Rushdie)の最近作の『憤怒』(Fury, 2002)の女性登場人物のニーラはリリパット-ブレフスキュ出身だとされている。このように現代文学にも依然として大きな力を持っているガリヴァーだが、現代日本社会でのイメージとなると、はなはだ偏ったものが横行していると言わざるを得ない。インターネット検索エンジンであるヤフーでガリヴァーを検索すると、「中古車買い取り会社ガリヴァー」、お菓子の国のガリヴァーランドなど、巨人としてのガリヴァーのイメージが圧倒的である。

本論は、作品の冒頭では、確かに素晴らしく大きな肉体を持ったおとぎの国のガリヴァーであった主人公が、小人の国から巨人の世界、そして馬の国などを経巡ることで、数々の屈辱に遭遇して転落していく悲惨を辿る。紙幅の都合で第3部は割愛する。作品冒頭でおとぎ話に心躍らせた読者は、ガリヴァーが第4部でヤプーという恐ろしく汚いケダモノに邂逅して、その存在を通して自らを省みて醜悪さを悟るに至ることを読み、絶望の憂鬱に沈むガリヴァーの様子を見て慄然とした幻滅を味わうことになる。ただ、本論の最後では、しばしばこの作品についてこれまで行われた解釈において、このガリヴァーが最終的に希望を完全に失い、狂気に陥るのだとして絶望のみを読み込んできたことには異議を唱えたい。ガリヴァーがかすかな希望の^{ともしび}灯火を失っていないことを、テキストの細部に読み込むことができると考えるものだ。

2. リリパット国——おとぎの国の巨人から厄介な肉体へ

難破によってリリパット国に漂着したガリヴァーが、永い眠りから目覚めると全身が地面に固定され細い紐で繋ぎ止められていたことは、あまねく知られていることだ。リリパット人が運んできた莫大な食料と飲料を飲み干すガリヴァーを見た小人たちについて次のような描写がなされる。「私がこういう驚異の芸をやってみせると、彼らは歓声をあげて私の胸の上をはねまわり、初めと同じようにヘキナー・ディーガルと叫ぶのだった」(19)。¹ ありえないほど巨大な肉体を持ったガリヴァーは、リリパット人らにとって降臨した神同然の存在であった。「おまえは月から落ちたのだろうか」(42-43)と彼らは言う。

本論では、『ガリヴァー旅行記』という架空旅行記と実際の航海者が書いた実録世界旅行記の関連性を念頭に、その相関関係を考えながら論を進めることになる。ガリヴァーの上記の状況は、ジェームズ・クック船長が第3航海で西洋人として初めてハワイを訪れたときに彼が神格化された状況と似ている。後にハワイの原住民たちがクックの神らしくない行為に怒り戦闘の末彼を殺害した状況も、ガリヴァーの今後の話しの展開にそっくりである。スウィフトは実録航海記を大量に読んでこの作品を書き上げたわけだが、半世紀後に実在の人物であるクック船長が文学作品での主人公と同じ目に遭遇したということは、スウィフトが異文化接触に関して深い洞察を持っていたことの表れと考えられる。

ガリヴァーはハンカチを張った舞台上で、小さなリリパット人の行進をさせて見せ、おもちゃの騎兵隊の模擬戦を実現したり、自らが股を開いて立ち、その間を軍隊に行進させることで人間凱旋門になったり、リリパットの敵国ブレフスキュが所有する50艘の艦隊をたった一人で拿捕し引っ張ってもってきたりして、おとぎの国の巨人としての力量を遺憾なく発揮することになる。

とある神殿に身柄を移されたガリヴァーは、紐による拘禁は解かれて、立ち上がることができる。ただ、この時点では、彼は依然として鎖に繋がれており、神殿の周りの半径2メートル弱しか動くことができず、軟禁状態、もしくは小屋に繋がれたとてつもなく大きな犬といった姿でしかない。皇帝と政府はガリ

ヴァーの処遇に悩んでいたが、ある事件を契機にガリヴァーを好意的に考えるようになる。巨人見物にやって来ていた群衆たちの6人の者がガリヴァーに矢を射て逮捕されてしまうのである。捕まった犯罪者は罰としてガリヴァーに渡され、ガリヴァーは彼らの処分を託される。ガリヴァーは「生きたまま喰ってやる」という仕草を見せ、それを見ていた群衆の中に恐怖が拡がるが、結局捕虜の紐を切って解放してやるのだ。

実録の新世界探検航海記においては、〈他者〉が人食い人種（カニバル）として表象されるのはよくあったことで、フィクションにおけるの典型が人食いを行うカリブ人とヨーロッパ人探検者の戦いを描いたダニエル・デフォー（Daniel Defoe）の『ロビンソン・クルーソー』（*Robinson Crusoe*）であり、これはガリヴァー旅行記出版の7年前の1719年に出版されている。『ガリヴァー旅行記』では、ヨーロッパ人と現地人の関係を逆転させて、ガリヴァーに人食いのジェスチャーを行わせているわけである。憎しみと戦勝の歓喜の極端な形の表現が人食い（カニバリズム）であるというのは、ガリヴァー旅行記においても同じなのだが、その恐怖は、ガリヴァーが捕虜を解放してやるという「寛容さ」によって、大きな安堵に変わることになる。

この「寛大さ」には命を助けられた捕虜よりも居合わせた群衆や兵士の感謝を引き出す効果があった。結果的にこのニュースが届いた宮廷と政治家にも、ガリヴァーに対する心証が著しく良くなり、ガリヴァーの解放令を可能にする大きな原動力となった。ガリヴァーが捕虜を寛大にも許したのが、人道的な配慮からであったのか、それとも計算尽くであったのかは作品からは読み取ることができない。しかし少なくとも結果から判断するに、ガリヴァーの「寛容というポリティックス」は奏功したのであり、極めて有効な手段であったと言えるだろう。寛容さはガリヴァーが作品を通して見せる態度であり、これはリリパット人が後に見せる「寛容さの見せかけを持った残酷」とは際立った対照を見せている。

しばらくすると皇帝から沙汰があり、幾つかの誓約条項を受諾し、政府側の条件を飲むことで、ガリヴァーは自由を取り戻すことができる。自由となった巨人と寛大なりリパット人が協調する和平条約が締結されたことで、ユートピ

ア的世界が現出するかに思われるエピソードであろう。しかし樂園がいともたやすく実現するほど、この作品は甘くはない。敵国ブレフスキュの侵略への全面的協力など屈辱の事項を含んだ誓約書を飲むのはガリヴァーにとって「あまり嬉しくない」事態であった。これらの条項の遵守を誓うときにガリヴァーが強いられた所作の奇妙さは、誓約書の奇妙な内実と通底するようだ。そのやり方とは「左手で右の足首をつかみ、右手の中指を頭のとっぺんに置き、拇指で右の耳朶にさわる」という極めてねじれた姿勢であった。『ガリヴァー旅行記』において、肉体の歪みは状況の歪みに繋がる場合が多いが、この箇所もその典型的な例と言えらるう。

例えば、「始めに」で言及したビッグ・エンディアンとスモール・エンディアンの対立に関してだが、前者は高い靴を履く習慣があり、後者は低い靴を履くとされている。皇太子はどちらにつくかについてアンビギュアスな態度をとっており、そのため片方の靴は高くもう一方は低いものを履いているために、姿勢のバランスを崩しており、足を引きずって歩く (hobble) とされている。歪みがリリパットに特徴的なことであるとすると、樂園に見えるリリパットの内実は実は捻れていると言わざるを得ないであろう。

自由を獲得した後、ガリヴァーはブレフスキュの艦隊を拿捕するが、皇帝が満足するかと思いきや、ブレフスキュ所有の残りの艦船をすべて捕獲して欲しいというさらなる要求を突きつけられ、人道的な観点からガリヴァーがこれを断ることで、リリパット宮廷との関係は急速に冷え込んでく。ガリヴァーが皇帝の申し出を断ったときの言葉は次の通りである。

しかし私は正義と政策の一般論をふまえて論を立て、この野心を忘れていただくように努力し、自由かつ勇敢な国民を奴隷状態におくための道具にはなりたくありませんとはっきりと言ったが、この問題が会場の場で議論されたときには、閣僚中の賢明な人々も私と同意見であったと言う。(47)

ヨーロッパ人が発見航海に乗り出していったとき、原住民同士の内紛に介入するべきかどうかというのは、大問題であった。強大な武器である火器を所有

しているヨーロッパ人が介入すれば、その側が勝利するのは火を見るより明らかだったからである。しかし、ヨーロッパ人が去った後、問題は必ず再燃し、後に続く報復合戦は、ヨーロッパ人が介入しなかった場合より激烈なものになる可能性が大だったのだ。時代は下るが、1772年から1775年に南太平洋の第2回発見航海を行ったジェイムズ・クック船長はタヒチにおいて同じ問題に直面している。タヒチは隣の島であるモーレア島と対立関係にあり、この島が万全の戦闘準備に入っているところを見たとき、クック船長は加勢を提案する。この状況に関して、航海に同乗していた若き博物学者であるゲオルゲ・フォルスター（George Forster）が『世界周航記』（*A Voyage Round the World, 1777*）で記述した後、興味深い省察を加えている。その箇所を見てみよう。

クック船長は、冗談で、自分の船で彼らの艦隊について行って、オ＝トゥ〔タヒチの首長〕の敵を砲撃しようかと提案し、最初のうちは彼らにはにこにこして賛成していたが、しかしすぐ後で、彼らの間で話し合いをし、それから声の調子を変えて、自分たちは船長の船が出発した5日後にエイメオ〔モーレア島のこと〕攻撃に出かけると決断したので、クック船長の助けを借りることはできないと告げた。……これが思慮深い決断であったことは確かだ。我々は同盟者として強力すぎて、我々が助勢する人々に対しても非常な脅威になりえたからである。……我々が島を後にしてしまえば、戦闘の前に敵が相手に感じていた強力さの大部分を、勝利者側が即座に失ってしまうと思われる。²

この著者は啓蒙思想家であり、人道主義に則った省察を常に行う良識の人であったから、敵国の奴隷化反対というガリヴァーの意見はこのような思想の流れに乗った賢明なものだったわけだ。しかし、クック船長やフォルスターとは異なり、ガリヴァーは屈辱条項とは言え、自由になるためリリパットへの荷担を誓ったわけだし、実際敵艦拿捕という行為をしているわけで、人道的発言によって彼の植民地主義荷担についてただちに免責されるわけではないことは確認しておくべきだろう。自分の言動でリリパット宮廷の不興を買ったことを知ったガリヴァーが、その直後の場面で、有名な事件、王宮の火事を小便で消

し止めるというエピソードが挿入されるのは示唆的だ。彼のこの優れてラブレ的なエピソードは、同時に極めて世俗的な文脈で読むことも可能である。ガリヴァーは火事を消し止めたことで得意だが、実は次のような一文を留保として挙げている。「この国の基本法によれば、いかに高位の者であっても宮殿内で放尿に及べば死罪ということなので、陛下が私のやり方にどこまで憤激されたか分からなかったのである」(50)。すなわち、ガリヴァーは極刑をも免れない罪であることを知っただけで、その行為に及んだというわけである。有り体に言ってしまうと、ガリヴァーは宮廷の自分に対する仕打ちへの意趣返しとしてその宮殿に排尿をし、その権威を意図的に貶めたとも言えるのだ。

自らの形勢が不利であることを感じ取ったガリヴァーは、ブレフスキュの講和団から招きを受けていたこともあり、リリパットからの亡命をもくろんでいるが、彼にリリパット宮廷から弾劾内容が報される。情報提供者により、ガリヴァーの罪はあまりにも大きいではあるが、皇帝の慈悲により「寛大な」減刑がなされることが告げられる。命を助けてやり、両目を潰すという寛大な処置ですませてやると言うのだ。ガリヴァーがブレフスキュの艦隊の残りを拿捕しなかったのは、敵の射る矢で目を潰さないかという不安がゆえであったので、原因たる視力を奪えば、存分に陛下のために働いてくれるだろう、というわけだ。

ガリヴァーが目を失うことを何よりも恐れていたのは事実で、ブレフスキュ軍から無数の矢を射られたとき、隠し持っていた眼鏡をかけて、目を守ったのであった。近代的知のあり方からして、世界の秩序を体系化する科学者の象徴はまさに目であり、発見航海者の端くれであり、多大なる好奇心を持って未知の世界を俯瞰しようとするガリヴァーには目と視力は不可欠であった。それを潰そうとするリリパットの寛大さのポリティックスは、ガリヴァーのそれとは全く異なっており、とりもなおさず「寛容さを装った残虐さ」に他ならない。

極刑に異を唱える穏健派の妥協案の一つが「目を潰すこと」だったのだが、もう一つが「徐々に食事の量を減らして飢え死にさせること」である。この一派の言い方では、この手段でガリヴァーの食費が国庫の負担となることが軽減され、さらに体重が半分になれば死体の処理もしやすくなり、その「頭蓋骨は

後世の人々の驚嘆的となる記念品」になるだろうというのである。もはやそのほかでかい肉体が「邪魔者」でしかないガリヴァーは、ここに至って「厄介な肉体」に成り下がったわけだ。素晴らしく巨大で魔法の肉体であった彼は、腐れば疫病をもたらす可能性のある余分な肉の塊でしかない。何というアンチクライマックス！　そしてこのような目に遭わざるを得なかった彼を形容するには「レミュエル・ガリヴァーの悲惨」としか言いようがない。

3. プロブディングナグ——人間そっくり

イングランドに戻ったガリヴァーは、リリパットから連れ帰った超小型の家畜を見せ物にすることで利益を得たのだが、そのような彼にとって、プロブディングナグという巨人の国に漂着した後、彼自身が見せ物の小人として巨人である主人のプロブディングナグ人に連れ回されて疲労のために死にそうになるのは皮肉な事態であった。ガリヴァーはこの国で奇妙な動物と見なされ、「どの部分も人間とそっくり同じにできていて、動作もすっかり真似るし、独特の言葉らしきものを話すらしいし、この国の言葉ももう幾つか覚えた」(86-87)と描写される。ガリヴァーはプロブディングナグにおいて、巨人を標準の人間としたとき、12分の1という小ささだが見かけは同じで言葉らしきものを話す「人間そっくり」の存在として捉えられているわけである。ドール・ハウスに入れられ持ち運ばれるガリヴァーは可愛らしいお人形ではあるが、国王との会話の中で、イギリスが戦争・宗教の分裂・党派党略などに明け暮れていることを打ち明け、国王は次のような感慨を漏らす。「ひとの尊厳など取るに足りぬな、こんなちっぽけな虫けらですら真似できるのであるから」(96)。ガリヴァーは人間そっくりだが、唾棄すべき昆虫と考えられているのだ。

ガリヴァーの特色は適応力の早さであり、巨人の国でも徐々に彼らの視線を獲得し、その目で世界を見るようになる。そのようなある日、彼は王妃が鏡(a Looking-Glass)に向かっているとき、手に乗せられて鏡に映った像を目にする。

お后様が私を掌にのせて鏡に向かわれたときなど、2人の姿が目の前に

そっくり出現して、これほど滑稽な対照はありえないくらいになり、自分でも実際より数段小さくなってしまったような気がし始めて、苦笑を禁じ得なかったこともある。(97)

自分と王妃が並んで映ったところを見て、彼は「これほど滑稽な対照はありえない」と思う。そして「自分が実際より数段縮んだように思い始めた」と言うのだ。高い位置にある巨人の視線を獲得したガリヴァーは、現実界の大きさのバランスを考える際、巨人標準で見始める。そして痛感するのが自らの肉体の卑小さなのである。

卑小なガリヴァーはプロブディングナグの巨大さを恐怖する。授乳をしている乳母の巨大な乳房に嫌悪感を覚え、自分を啜えて運ぶスパニエル犬を恐れ、命を狙うトビを恐れ、自分の前で平気で裸になり排尿する巨大な女中を恐れ、巨大なプロブディングナグ人の公開処刑を見て恐れる。首がはねられたとき、血がヴェルサイユ宮殿の大噴水より高く飛び、巨大な頭が1キロ半も離れた自分の所まで転がってくるのを見て震撼する。一番恐ろしかったのが猿で、ガリヴァーを自分の赤ん坊と勘違いした猿は、汚らしい食べ物を餌としてガリヴァーの口につっこみ、助けられたガリヴァーはそのすべてを吐いてしまう。動物や昆虫同様、もしくはそれ以下に貶められたガリヴァーは、猿のエピソードの後で、象徴的な事件に遭遇する。それは、お付きの女の子と散歩に行ったとき道の真ん中に牛の糞があり、それを飛び越えようとしたとき失敗し、糞のど真ん中に落下し糞塗れになるという汚らしいエピソードである。これはとても小さなエピソードだが、現在のレミュエル・ガリヴァーの悲惨を象徴するエピソードであり、かつ第4部の馬の国でヤフーの糞尿攻撃に遭い、汚物に塗れる姿を予示している。悲惨の最低点に至るのはもう近いのだと感じさせる部分だと言えるだろう。

自分の国であるイングランドを愛すると自認するガリヴァーは、国王に自国の宣伝を行う。「イングランドの政治についてできるだけ正確に説明せよ」(116)と国王が彼に尋ねる。ここから長い時間をかけ、ガリヴァーはイギリスの貴族、戦争、常備軍論争などについて自分では称揚するつもりで得々と語っ

ている。ガリヴァーの意に介しない説明の描写に作者の風刺が隠されていることは一目瞭然で、当然これを聞いたプロブディングナグ国王は、次のように鋭く指摘する。要するに過去1世紀に渡るおまえたちの歴史は謀略、反乱、殺人、虐殺、革命、追放の積み重ねではないかと。これらは、貪欲、派閥抗争、偽善、裏切り、残虐、激怒、狂気、憎悪、嫉妬、性欲、悪意、そして野心が産み出した、最悪の結果ではないかと言うのだ。そして、以前ガリヴァーのイングランドの説明を簡単に聞いたときは、ちっぽけな昆虫に真似をされるような卑小な人間全般の墮落に思いを馳せていたのだが、今回は、ガリヴァーの住むイングランドを特定して断罪する。「お前自身の話と、あれこれ手を尽くして絞り出した答えから推察するに、おまえの国の住民の大半は、自然に許されてこの大地の表面を這いずりまわる生物の中でも、邪悪を極めたおぞましい虫けらの族と結論するしかない」(123)。ガリヴァーの悲惨のみならず、イングランドも含めたガリヴァーが言うところの「文明国」がその悲惨に巻き込まれているのだ。

次にガリヴァーは火薬の発明の自慢をする。大砲は帆船をばらばらにできるし、何百人もの人間を一気に吹き飛ばし木っ端微塵にできると言う。包囲した都市を壊滅させることができるし、近くにいる人間の頭を吹き飛ばし、脳みそをあたりに飛散させることができると得意満面だ。ガリヴァーは陛下へのささやかなお礼として、火薬の調合の仕方を知っているので、作り方を伝授いたしますと申し出る。

18世紀イギリス小説では、『ロビンソン・クルーソー』を含めてバラバラ死体が描かれることがある。クルーソーは浜辺で野蛮な宴の後に出くわし、食い残された死体の切れ端や肉骨片を見たとき、「自然が私の胃袋から無秩序をはき出させた」(Nature discarg'd the Disorder from my Stomach)と言っている。彼の吐き気がどこから来ているかは明らかであろう。人間の肉体というテーマが重要であった『ロビンソン・クルーソー』や『ガリヴァー旅行記』において、統一されたまったき人間の肉体は世界の統一感に繋がるもので、秩序の象徴であった。バラバラにされた肉体は、西洋的近代世界観の転倒を可視化する、最も激烈な表現だったのだ。もちろん、18世紀イギリスではまだ公開処刑が行

われていたわけだから、それらを目撃した作家の想像力にそれらの光景が入り込んだことは容易に想像がつく。

そのような価値観が趨勢であるイギリス 18 世紀にあって、ガリヴァーのように嬉々として人間の解体を語る様子を見ると、村上春樹の糾弾した、爆撃弾や戦車で殺戮を行う「壁」がすでにこの時代に屹立しており、ガリヴァーはここで「壁」の側に立って弁明を行っていることが分かる。書き手スウィフトによってガリヴァーの墮落と近代の罪悪が糾弾されていることは明らかだ。おぞましい大砲の威力の話しを聞いて国王は「恐怖のあまり仰天してしまわれた」のだが、この戦慄は読者も共有するところであろう。さらに国王は「おまえのような地を這いずりまわるだけの無力な虫けらが……かくも人の道にもとる考えを抱けるとは驚きだ、しかも荒涼たる流血の場にもまったくたじろがず、日常茶飯の如くに」(123)と大いに立腹する。イングランドの「壁」を代弁して弁明をするガリヴァーだが、多少誇張はあるものの現実の悲惨さを述べるにつれ、プロブディングナグ王の嫌悪感は大きくなるのである。ガリヴァーの全面的戦争協力を要請したりリパット国王とは異なり、プロブディングナグ王は、ガリヴァーの火薬の知識提供の申し出をきっぱりとはね除ける。「技術と自然とそのいずれに関するにせよ、新発見ほど嬉しいものはないのだが、おまえの言う秘密を知るくらいなら、この王国の半分を失うほうがまだましだ」(124)と喝破するのである。

ガリヴァーと国王のやりとりを聞いていると、かつてガリヴァーは体が小さいものの方が理性を持つのだと主張したのだが、どうも人間は体が小さいほど残虐で、非人間的であるという認識をこの作品に読み込むことができそうだ。それと、人間は歴史が進むにつれて愚かになっていくというスウィフトの「退化論」(Degeneration)が濃厚に書き込まれているようでもある。人間は退化していくという感覚は、文明の持つ野蛮な暴力を拒否した巨人のプロブディングナグにもあり、それはガリヴァーがプロブディングナグの図書館を訪れて、巨人の国の古典を読むことで明らかになる。ガリヴァーが読んだ道徳書には、最近の墮落した時代にあつては、新生児の体が年々小さくなっており、かつては巨人もいたという我が国では、徐々に体が小さくなるという退化を経験してい

るのだ、と書かれている。巨人国にあって、すでに肉体が縮小するという退化の自覚があったと描かれるのは、興味深いことだ。人間の身体の大小が、この作品にあっては比喩的にモラルの高低を表しているのである。

プロブディングナグの皇帝に「人間ではない」(inhuman)と批判されたイングラントとガリヴァーは、ある意味で、巨人が退化し衰亡して行き着いたなれの果ての姿なのである。巨人の国で図らずも自らの国とそこに属する自分の不道徳性を露呈してしまい批判されるガリヴァーは、リリパットでの不当な屈辱の経験を経た後、プロブディングナグで、受けて当然の屈辱を招来し、悲惨はいやましになる。この国へ到着した直後は「人間そっくり」であったガリヴァーは、「人間ですらない」=「ひとでなし」に脱落するのである。レミュエル・ガリヴァーは、ここに至って悲惨を極めたようだが、まだまださらに酷い屈辱が彼を待ちかまえている予感を抱かせる物語展開である。

プロブディングナグでは、ガリヴァーは最終的にドール・ハウスに入った状態でワシにさらわれ空中高くまで運ばれ滑走、最後はるか下方の大海原に墜落する。彼の物理的大墜落は、彼の心理的降下がそれに先駆けて執拗に行われているため、読者には唐突な印象を与えない。

彼が大海原で帆船に救助されてからの、一つのエピソードに着目しておきたい。巨人の視線を獲得していたガリヴァーには、普通の背丈の人間は小人にしか見えず、船員たちを見るとびっくりして笑いをこらえることができない。彼がなぜこれほど巨人の視点に慣れ親しんでしまったかと言うと、実は王妃と並んで鏡に映ったときに恥じ入ったガリヴァーはそれ以来、二度と鏡を見ることはなかったからなのである。鏡に自らを映して他のものと比較すると自分の卑しさを思い知らされるからだ。

ガリヴァーは自らの姿を正視できない。ガリヴァー自らが「人々がしばしば自らの欠点に目をつぶるように、私は自分の小ささには目をつぶってしまったのだ」と告白している。観察者の定点であるべき自分を忘れた者が、近代的科学者として未知の国々を描写することができるのかについては、はなはだ疑問であり、今後のガリヴァーの活躍について、私たちは大いに不安を抱かざるを得ない。

4. ヤフーの国へようこそ

第4部でガリヴァーは南海（今の南太平洋）のインディアン（原住民）との交易を命じられ船出するが、補充した船員たちが海賊であったため、反乱を起こされて、とある島に流されてしまう。その島で観察していると、地面についた足跡のほとんどは人のものと馬のものだ。そのうち、「なんとも異様で醜い」動物に出会い、あまりに酷い外見を見て慌てて隠れる。この動物の描写を少し見てみよう。「頭と胸は、縮れた毛か細長い毛で蔽われ、山羊のような髯があり、背中及び膝から足の前面にも長い毛が続いているが、体のその他の部分はむき出しで、薄い黄褐色の皮膚が確認できる。尻尾はなく、臀部にもまったく毛はないが、肛門の周囲だけが別なのは、地面に座ったときにそこを守ろうという自然の配慮であろうか。」博物学者のような一見客観的描写である分、おぞまじさが際立っている。後にさらに観察したときには、ガリヴァーはその姿に人間の姿を認めて背筋が寒くなるのだが、その際の描写によるとこの動物は「顔は平たく広く、鼻は窪み、唇は厚く、口は横に広が」っている。この平たい顔と窪んだ鼻と厚ぼったい唇、というのは実は18世紀に黒人の典型的特徴として認められていたものだ（スウィフト出身のアイランド人の特徴でもあるとの説もある）。差別意識が何はばかることなく、つまりポリティカルにインコレクティブな言い回しにより表現されていた18世紀イギリスにあって、西洋人が人間の中で最も劣っていると考えた黒人についてはこのようなストック・イメージがあったわけである。ダニエル・デフォーの『ロビンソン・クルーソー』に出てくるカリブ人（当時は黒人と考えられていた）であるフライデーの描写を見れば、上記の動物と全く同じ言葉で描写されているのが一目瞭然である。

その後、ガリヴァーは、知性を持っているらしい馬と出会うが、馬同士で会話をしている中に「ヤフー」という言葉が頻発しているのに気がつく。ここで、私たちはかの高名なるヤフーに初めて出会うことになるわけだ。Yahooという英単語はスウィフトが発明した語であり、当然かの有名なオックスフォード英語辞典も、英語文献の中で史上初めて使われた例として引用している。その語義は「墮落したけだもののような人間」である。ヤフーは、屍肉をあさる世に

も醜い動物、墮落した人間の権化である。

ガリヴァーはヤフーと初めて邂逅するとき、驚くべき態度を取る。その動物は初めて見た生物に出会って顔を覗めた後ガリヴァーを凝視し、そして近寄ってきて前足を挙げるのだが、ガリヴァーはすぐさま短剣を取り出し、その平たい部分で思いっきり殴りつけるのである。生理的嫌悪感を強く持ったガリヴァーの気持ちは分かるのだが、前足を挙げたヤフーはひょっとして友好的に「やー」というつもりで挨拶をただけなのではないだろうか。実際の航海者の間でも、ファースト・コンタクトで前触れなくいきなり暴力を振るうのは極めて問題のある行動であると考えられていた。攻撃を受けて大声で叫んだのに応えて、40匹の仲間が飛んできて、木の上からガリヴァーめがけて排泄物を浴びせかけるが、先に手を出したのはガリヴァーなのだから、いささか、というかかなり汚いやり方はあるが、このような糞尿攻撃の報復をくらうのも、やむをえないのではないかと思われる。

いずれにしても、様々な悲惨に出くわしてきたガリヴァーだが、ついに世界で最も醜いとされるケダモノから、しかも木の上から下にいる彼に向かって、排泄物を浴びせかけられるのであるから、落ちるところまで落ちたと言ってもいいだろう。

知性を持った馬はフウイヌムという生物であることが判明し、ガリヴァーは捨ててくれたフウイヌムのことを「ご主人様」と呼び、飼われることになる。ご主人様に「理性のおぼろげな光」(Some Glimmerings of Reason)を持っていると言われ、ご機嫌になる。まことに卑屈な様だと言えよう。いつもながらのたゆまぬ努力でフウイヌム語を体得したガリヴァーは、ご主人様の質問に答えて、プロブディングナグと同様に、イングランドの情勢を説明する。戦争について話していたところ、主人のフウイヌムが、「おまえたちの肉体的劣勢を見る限り、他人に大きな危害を加えることができるとは思えないから、戦争での死者数に関しておまえの言うことは〈ないことを言う〉(said the Thing which is not) だな」と指摘をする。フウイヌムの国では嘘をつくものはおらず、それどころかその概念すらないので、「嘘」は「ないことを言う」という表現でしか表すことができないのだ。

ガリヴァーは主人の無知に笑いをこらえることができない。プロブディングナグのときと同様に、再び大量殺戮の武器を列挙し、それらを使うヨーロッパの「壁」がいかに甚大な被害をもたらすかを、例によって誇張しながら語る。「弾丸1発で百人もの敵が吹き飛ぶのを目撃したことがあり、バラバラになった死体が雲の高さから落ちてきて、見物人たちの大きな娯楽になった」。まことに偽悪趣味の物言いだと言わざるを得ない。

フウイヌムにおけるガリヴァーがプロブディングナグの時とで違う点は、彼が反省するに至る点である。プロブディングナグではただただ悦に入って残酷な話をしており、巨人たちから一方的に批判されるだけだったのだが、フウイヌムではご主人たちの意見に耳を貸す。

しかし、正直なところ、この優秀な四足の幾多の美德を人間の腐敗に対置されてしまうと、自分の眼は開かれるは、理解力は広がるはで、人間の行動と感情を見る眼がすっかり変わり始め、同族の名誉など云々しても仕方ないと思いましたが、それまで自分ではまったく気づきもせず、われわれが人間の弱点などと考えもしないような欠陥を日々次から次へと指摘してみせるわが御主人のような鋭い判断力をもつ人物を前にして、そんなことがやれるはずもなかった。さらに私は、彼を手本として、嘘とか欺瞞のすべてを徹底して嫌うことを覚え、真実こそ愛すべきものと見えてきて、そのためにはすべてを犠牲にしてもいいと決心した。(240)

まじめな人間のさがで、ガリヴァーは、いったん反省すると、真逆に方向を変えてしまうのである。彼はフウイヌムへの尊敬のため、また人間の欺瞞に目覚めたためもあり、二度と人間世界には戻らず、フウイヌムの美德を学ぶ余生を送ろうとまで思う。ただ、主人のフウイヌムにとっては、もしガリヴァーがヤフーであるとするなら、懲りないヤフーでも反省するヤフーでも、下劣なヤフーであることには違いがないので、自分の家にとどめることはないだろう。反省したガリヴァーにもさらなる悲惨が襲うことになりそうだ。

衣服を着て言語を話すことで、ヤフーとは一線を画していたガリヴァーだが、とある事件が契機となり、疑念を差し挟む余地なく1匹のヤフーであることが

発覚する。それは全裸になり川でガリヴァーが水浴びをしていたところ、それを見かけた雌のヤファーが発情し、全速力で走ってきて川に飛び込み、ガリヴァーに抱きついたという事件である。金切り声を上げてフウイヌムの主人に助けてもらい事なきを得たのだが、フウイヌムたちの笑い話にされてしまう。笑われるだけではなく、雌の若いヤファーの欲望の対象になるということで、ガリヴァーは交尾可能な雄のヤファーであることが同定されてしまうのだ。

最終的にガリヴァーはフウイヌム最高会議で追放が決まり、放逐される羽目になってしまうのだが、その前にもう少しフウイヌムという高等馬の生態を観察してみたい。

フウイヌムの国は理性最優先の社会で、友愛の慈愛を尊びはするのだが、フウイヌム全体を尊重する方が優先されるため（全体主義なのである）、自分の子供を他の子供より愛するということはなく、どの子供も平等に愛するのだとされている。フウイヌムの男女は子供を作るときだけ一緒になり、男女の子供が1人ずつできると別れ、子供たちは集められ公立保育所で育てられる。徹底した自己管理社会で、男女の愛よりもフウイヌム全体の人口数調整が優先される。従って結婚も愛情からではなく、優生学的見地からなされると説明されている。従って、プロブディングナグの「人類退化説」とは無縁だと言えるのだ。

ガリヴァーの時代に「優生学」(eugenics)という言葉は存在しなかったが、ガリヴァー批評では、フウイヌムがその思想の体現者として論じられることがある。産児制限を設ける点、生殖において遺伝形質の改良を重視する点、自己の種を重視するためしばしば〈自分たち〉以外のものへの差別に向かう点などは、フウイヌムに完全に合致する。特に最後の差別という点では、ヤファーの迫害に関してはかなり顕著なものがある。優生学の行き過ぎは歴史上最大の悲劇の一つであるナチスのユダヤ人虐殺を引き起こしたわけだが、ナチスの萌芽をフウイヌムに読み込むという学説もあるのである。もしそうだとすると、ガリヴァーの代弁する「壁」とは異なった意味での恐るべき殺戮を行う「壁」の存在の可能性が、フウイヌム記述の中に書き込まれていることになる。

フウイヌムに個人的な愛情を代表とする感情が欠落している例としてよく取り上げられるエピソードがある。ある日、ガリヴァーのご主人のもとをある夫

婦と子供が重要な用事で訪問する予定になっていた。ところが妻と子供はかなり遅れてやってきて、こういいわけをする。午前遅くに夫が亡くなり、どこに彼の遺体を安置するかで召し使いと長い間相談をしていたので約束に遅れたと言うのだ。妻子供の様子は普段と変わりなく、悲しみを微塵も見せない。一般には、フウイヌムは肉親の死や自らの死を全く悲しむことがないとされ、このエピソードはフウイヌムの冷血性の例としてあげられることが多い。だが、このエピソードの最後に「その妻は3ヶ月後に亡くなった」とさりげなく付け加えられていることを見過ごしてはいけない。家族が亡くなった後、人間はずっと泣いているだろうか。肉親を亡くした人が平然とした表情でその死を語っているからと言って、その人が冷血漢だと私たちは思うだろうか。我が身が引き裂かれるような悲しみを家の中で感じていても、外に出るときは別の表情を取り繕うのではないだろうか。夫を亡くしたフウイヌムの妻は、外見では平気そうだが、実は外には出さない深い悲しみを感じていて、悲しさのあまり夫の死後3ヶ月後に亡くなったのかもしれないのである。

だから、私はフウイヌムの優生学をあまり強調する気にはなれない。フウイヌムは確かにヤファーを差別している。主人が代議士を務めるフウイヌム国会では、ヤファーを絶滅させるべきかどうかについて真剣な議論が交わされている。しかし絶滅させるべきだという結論には至らない。それは、ガリヴァーと親しい主人がヤファーを弁護してくれたからであった。愛情を知らない冷血漢なら、そのような個人的な気持ちからヤファー全体の保全を願い出たりしないだろう。確かに主人の議論の中で、家畜であるヤファーの代替物になる騾馬の飼育を急ぐべきであり、とりあえずはガリヴァーの言うところの去勢を若いヤファーに試してはどうかという理屈には、理性的なフウイヌムらしい冷徹な論理が見られる。しかし、この国会開催時に同時に決議された「ガリヴァーの国外退去命令」をこのときガリヴァーにどうしても切り出すことができないフウイヌムの主人について、ガリヴァーに対して全く個人的愛情を持っていなかったとはいきれないと思うのだ。

しばらく経ってから、結局はその国会命令を聞かされたガリヴァーは、底無しの悲嘆と絶望に襲われて、その場で気絶してしまう。彼はフウイヌムの価値

鏡を共有し、その視点を完全に獲得しているからだ。このことはプロブディングナグと同様に、「鏡」に纏わるエピソードを使って語られる。「私は、たまたま湖や泉に自分自身の姿が映っているのを眼にしたときは、自分自身へのおぞましさと嫌悪感によって顔を背けたのである。自分自身の体を見るぐらいなら、普通のヤフーの姿の方がまだ我慢できた」(260)。ここでは姿を映すのは鏡ではなく水面となっているが、役割は同じである。プロブディングナグでの鏡の描写に比べても、彼の自己嫌悪ははるかに悪化していると言える。あのおぞましいヤフーを見る方が自分を見るよりましだと言っているのだから。彼は人間嫌い、自己嫌悪のあまり、馬の立ち振る舞い、仕草などすべてを真似するようになる。話し方も歩き方も馬そっくりになっているのだ。第2部のプロブディングナグでは、彼は「人間そっくり」から「ひとでなし」まで格下げになったのだが、ここでは、さらに「馬そっくり」という悲惨に陥っているのである。

馬の国で馬そっくりで生きる卑屈さを私たちはガリヴァーの悲惨と感じるが、この時点でのガリヴァーにとってこれは至福の日々であった。これを完全にたたき壊したのが、先ほど触れた「国外退去命令」だったのである。ヤフーに特徴的だとされる鬱状態(メランコリー)にガリヴァーは陥るが、最後はやむなくボートを造り、フウイヌム国を去ることになる。旅立ちと別れの日、海岸まで見送りに来てくれたフウイヌムの主人の行動について、ガリヴァーは「単なる好奇心からか、あるいは親切心からなのか(この言葉を使っても自惚れということにはなるまい)」と迷っているが、フウイヌムに「人間らしい」温かい心を読み込んでいる論者としては、「親切心」の原語 Kindness に「愛情」という意味があるように、フウイヌムの暖かさを見たいと思うものだ。事実、主人に加えて、これまで親切にしてくれたガリヴァーの親友である栗毛も見送りに来て、ガリヴァーのボートの船影が水平線に消えるまで海岸で見送り続けてくれており、ガリヴァーに「体に気をつけるんだよ、優しいヤフー君」と何度も叫んでくれたのであった。

偶然出会ったポルトガル船に運良く拾ってもらったガリヴァーは、イングランドの自宅にたどり着く。しかしヤフーへの嫌悪感から船から飛び降りそうに

なった後、船室に繋がれてしまったり、馬言葉の訛りが消えずに笑われたりして、彼は脱出した後、幸福であったようには読めない。自宅で妻の抱擁に迎えられたときには、「こんなおぞましい動物（ヤファー）と長い間接触していなかった」ガリヴァーは、ショックのあまり悶絶してしまう（フウイヌム国で雌のヤファーに抱きつかれたエピソードを思い出すところだ）。庭に馬屋を建てて2頭の馬を飼いそこに引きこもり、1日に4時間もその馬たちと会話をするのを唯一の楽しみにしているガリヴァーの悲惨を見ると、この作品の結末に絶望を読み込みたくなるのも理解できる。

しかし、ガリヴァーが読者諸氏に別れを告げる部分を見てみよう。

わが家のヤファーたちに、どこまで言うことを聞く動物か分からないが、ともかくあれこれ教え、またなるたけ鏡で自分の姿を確認して、できればそのうちに人間という生き物の姿に慣れるようにしたいと思うのだ。(276)

これまで自分の姿から目を背けていたガリヴァーは、最後になって自分の姿が鏡に映っているのを見ることに慣れようとしている。鏡の自分を見ようと努力している姿には、いやいやながらも周囲の世界と折り合っていこうとする新たなガリヴァーを見いだせるのではないだろうか。事実、徐々にではあるが、次のパラグラフにあるように、妻との距離を少しずつ縮めようと努力しているし、近所のヤファーたちと何とかうまくやっていく日が来るのではないかと期待しているのだ。最後になっても人間はヤファーと呼ばれている。しかし、ここでガリヴァーは、人間は所詮ヤファーなのだという諦観に達しているのではないかと思う。ヤファーはヤファーなりのやり方があり、それに慣れていかななくてはならないのである。

外見上はいやがっている風を装って照れ隠しをしながらも家族や近所の人たちと繋がりを持つようとしているガリヴァーの姿を見ると、夫を亡くしながらも平静を装っていたフウイヌムの妻（そしてわずか3ヶ月後には後を追って亡くなった）や、友との別れをいつまでも惜しんで船影が消えるまで見送ったフウイヌムの主人と親友などの姿を思い出さずにはおられない。フウイヌムの価値

観に染まったガリヴァーだが、ひょっとすると愛する人や友と繋がっていかうとする気持ちは、彼がフウイヌム国で学んだ最良の教訓だったのかもしれない。ガリヴァーの最後の別れの言葉の中には、レミュエル・ガリヴァーの希望の光が見える。

村上春樹のエルサレム賞受賞スピーチに戻って、ガリヴァーの結末を考えてみると、彼は、いわば潰されてしまった卵とも言えるかもしれない。様々な世界を航海して、自分の国を弁護しようとしたり、訪れた国の制度への賞賛のあまり自国を軽蔑したりしてきた。リリパットでビッグ・エンディアンとスモール・エンディアンの狭間にあって揺れた彼が示すように、ガリヴァーは自国イギリスのシステムを説明しようとしてもがくうちに、自分が卵であること、つまり人間であること（人間性）を忘却してしまった。壁はあまりにも高く堅固であり、卵がこれに立ち向かうことが困難であるのと同じように、壁はその説明をしようとするにはあまりにも不条理なものである。

プロブディングナグでガリヴァーは、近代兵器が暴力や悲惨をもたらしているという認識を持っていたのだが、いったん始めた抗争は留まることがないというのは、背後の「内在する作者」も認めざるを得ない近代の原罪だと思われる。武器改良に明け暮れたヨーロッパ列強（そして後には日本をも含めた世界規模で）の覇権争いは、ガリヴァーが出版されて300年後の今日も一向に止む気配を見せない。ガリヴァーはプロブディングナグたちとの政治的駆け引きの際、言葉の使い方において愚かだったが、火器を称揚する彼の考えに今でも諸手を挙げて賛成する人は世界の何分の一かを占めているのだ。近代の罪を背負った上で出発したイギリス18世紀文化をきちんと読み直し、現代社会のありようについて再考すべきであるというのは、私の持論である。

村上スピーチの中でこう言う。「壁と戦うには、我々は魂を一つにし、温めあい、力を合わさなければなりません。」潰された卵のようにぼろぼろのガリヴァーは、他の人々との繋がりを取り戻そうという努力を始めようとしている。これこそが、彼のかすかではあるが、輝く一筋の光なのではないだろうか。

における講演に基づくものである。

注

¹ 本論における *Gulliver's Travels* からの引用は、すべて次の版による。Jonathan Swift, *Gulliver's Travels*. Oxford: Oxford University Press, 2005. 頁数は原文のものであり、引用の後の括弧（ ）内に示す。なお、日本語への翻訳は富山太佳夫訳の岩波書店のユートピア叢書版を参照し、必要な場合訳文に一部変更を加えている。

² ゲオルゲ・フォルスター『世界周航記』下巻 289-290, 岩波書店「シリーズ世界周航記」第6巻。

Synopsis

Disasters and a Glimmering of Hope in Lemuel Gulliver Noriyuki Hattori

Following Gulliver's footsteps from Lilliput to the land of the Houyhnhnms allows us witness his fall from possessing a gigantic and fabulous body to becoming an ignominious beast. When it is realized that the yahoo he encounters and detests in the Houyhnhnms is none other than a human being, Gulliver's deep self-abhorrence becomes intense.

Gulliver adapts himself too much to the littleness of Lilliput and to the bigness of Brobdingnag consecutively, and despises humanity. Once, when he tries in vain to identify with a giant, he averts his eyes from looking at a mirror image of himself. In the last voyage to Houyhnhnms, he develops an idealistic notion of being a horse and rejects his self-recognition of 'being a human' = his 'yahoeness'.

Previous researchers have argued that the nature of the Houyhnhnms is serene but without heart, an idea to which I oppose myself. Gulliver's master is unwilling to apprise him of the decision of the General Assembly of the Houyhnhnms to expel him, because he has a warmth and a friendly feeling towards him. The kindness he shows to Gulliver at his parting from the Houyhnhnms is shared by the best friend of Gulliver's Sorrel Nag, who cries out (probably with tears) 'Take Care of thy self, gentle Yahoo!' The best lesson he learns from the horses is 'humane kindness', or the consideration and compassion which they show to him.

After he gets home, his melancholy is deepened because he is surrounded by the yahoos he detests. But this should not lead to this conclusion: Gulliver in his last phase suffers irrecoverable despair. Some notice should be taken of the fact that he 'behold[s] [his] figure often in a glass, and thus if possible habituates [him]self by time to tolerate the sight of a human creature,' and thus tries to be on tolerable terms with human

beings. This is symbolically supported by an incident in which Gulliver starts to look at himself in the mirror again. Thus we may note that there *is* a glimmering of hope in Lemuel Gulliver at the very end of the work.